Ⅱ. てんかん患児における親子関係

黒川　徹（九州大学医学部小児科）
松尾　誠（　〃　）
陳　永栄（　〃　）
富田　茂（　〃　）
高木誠一郎（　〃　）
合屋長英（　〃　）
山本百合子（九州大学教育学部治療教育学科）

最初に自分のこどもがてんかんと告げられたとき多くの両親は動転し不安を感じ，やがて決意をしていく。しかも本症は経過が長いため精神的時間的経済的負担も大きい。本研究においては社会的環境が以前とは変化している現時点において親がどのように感じているかについて調査した。

対象と方法

九大小児科に通院中のてんかん患者のうち調査のできた１９３名である。調査は外来においてアンケートによった。

結　　果

1) 親からみたこどもの発達と発作のコントロール。重度（２９人，１５.０％）・中等度（１７人，8.8％）遅滞では発作が止まっているものは３５％，減っているものは２４％，不変・増多４１％であり，軽度・境界遅滞（３９人，２０.２％）および正常発達（１０８人，５６.０％）で止まっているものは各々７２％，７６％，減っているものは１５％，１６％，不変・増多は１３％，８％であった。

2) 行動上の問題としては落着きのないもの（２３.５％），手足が不器用（４４.４％），動作行動が遅い（２２.９％）ものがみられた。

3) 親の悩は表５の如くで，薬の副作用についで知能低下の恐れ，発作治癒の見通しがつかない，さらに結婚・就職のことなど将来の見通しが立たないというものが多かった。親が面倒をみれなくなったときのことを心配しているものも多かった。

4) 田研式親子関係診断テスト。まず本テストの厳格型，溺愛型等各々の項目について平均点を調べた。発作が１年間起らずかつ知能正常の群では全項目普通であったが発作が起こっている群では親による積極的拒否および溺愛の傾向がみられた。また危険域に入った率をみると発作あるいは発作遅滞の有無にかかわらず３０～３８％が溺愛を示し，発達遅滞のあるものでは６９％が消極的拒否，３１％が不安を，発達正常であるが発作のあるものでは３３％が積極的拒否を示した。

考按とまとめ

こどもに異常があると分ったとき親はショックを受け嘆き悲しみ，そして決意をする。これまでの調査でもてんかん患児の親はこどもの将来のことを強く憂慮していることが明らかにされている。本研究では社会や学校の偏見に対する心配がこれまでの研究におけるより減少していた。しかし全体として溺愛の傾向があり，発作があるものは積極的拒否，発達遅滞のあるものでは消極的拒否がみられた。

文　　献

Dorator, D. et al: Pediatrics 56: 710, 1975.

親　の　悩　み（193人）

こどもの将来の見通しが立たない。	70	(36.3%)
親が面倒をみれなくなったときのことがどうなるか心配である。	75	(38.9%)
学校で理解が得られない。・・・・・・	19	(9.8%)
隣近所で理解が得られない。・・・・	25	(13.0%)
学行成績が振るわない。・・・・・・	49	(25.4%)
こどもにあった教育機関がない。	29	(15.0%)
病気についての相談相手がいない。	25	(13.0%)
結　婚・・・・・・・・・・・・・・・・・	74	(38.3%)
就　職・・・・・・・・・・・・・・・・・	73	(37.8%)
進　学・・・・・・・・・・・・・・・・・	59	(30.6%)
薬の副作用・・・・・・・・・・・・・・	108	(56.0%)
発作治癒の見通しがつかない。・・・	72	(37.3%)
知能低下の恐れ・・・・・・・・・・・	78	(40.4%)

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

最初に自分のこどもがてんかんと告げられたとき多くの両親は動転し不安を感じ,やがて決意をしていく。しかも本症は経過が長いため精神的時間的経済的負担も大きい。本研究においては社会的環境が以前とは変化している現時点において親がどのように感じているかについて調査した。